

App.2 Lacquerware (Excavation report of HwangNam DaeChong, vol.II

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: SIN, Chang-su メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00059501

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



は八葉の花形で、周縁部と葉とを区分するように列点文を入れ、それぞれの葉には直径 0.2cm の円点文を施している。[総高 3.6cm、八葉形文様板の幅 4.2cm、重量 13.3g]

図面 71-⑦⑧は鍍金銀製で、北便の銀製小盒上で 1 点、南便の金製盥付^{かん}近で 1 点が出土した。

直径 2.6cm の円形鍔^{かん}が三葉の心葉形地板に付き、連結環が抜けないように直径 0.6cm の円板を挟んで仕上げている。現在木心は全く残っておらず形態は不明であるが、厚さは約 1.0cm で、ほぼ扁平な木板を身部に使用していたようだ。[図面 71-⑦：最大横幅 8.0cm、総高 4.1cm、重量 33.7g；図面 71-⑧：最大横幅 7.9cm、総高 3.8cm、重量 26.9g]

原載：

慶州文化財研究所編 1994 『皇南大塚（南墳）発掘調査報告書』本文篇，文化財管理局文化財研究所：118-122。

慶州文化財研究所編 1993 『皇南大塚Ⅱ（南墳）発掘調査報告書』図版・図面篇，文化財管理局文化財研究所。

公開先：

『皇南大塚』南墳（本文）（韓国文化財庁 HP）：

http://www.cha.go.kr/cop/bbs/selectBoardArticle.do?nttId=15961&bbsId=BBSMSTR_1021&pageIndex=1&pageUnit=10&searchCnd=tc&searchWrd=%ed%99%a9%eb%82%a8%eb%8c%80%ec%b4%9d&ctgryLrcls=&ctgryMdcls=&ctgrySmcls=&ntcStartDt=&ntcEndDt=&searchUseYn=Y&mn=NS_03_08_01

『皇南大塚』南墳（図版・図面）（韓国文化財庁 HP）：

http://www.cha.go.kr/cop/bbs/selectBoardArticle.do?nttId=15962&bbsId=BBSMSTR_1021&pageIndex=1&pageUnit=10&searchCnd=tc&searchWrd=%ed%99%a9%eb%82%a8%eb%8c%80%ec%b4%9d&ctgryLrcls=&ctgryMdcls=&ctgrySmcls=&ntcStartDt=&ntcEndDt=&searchUseYn=Y&mn=NS_03_08_01

付 2：

『皇南大塚 北墳発掘調査報告書』

漆器

シン チャンス
申昌秀 신창수

（文化財研究所 学芸研究士¹）

5) 漆器

大部分が木棺周辺に設けられた石段の東北便から山になって集中的に出土した。

大体 30 数個分になるものと見積もられるが、全て腐食がひどく、出土当時、耳杯とみられる 4～5 個分、内部が 4 区画に分かれた方形鍔盒とみられるもの 2～3 個分、盞とみられるもの 4～5 個分が確認されただけで、器形が分からないものが大部分であった。

器の心は全て木質で、木目が横に通った薄い木心でできたものと薄く削った網代状に編んだ竹皮を心にしたものが見られた（挿図 24）。

すべての器の内外面に漆を塗っており、大部分の内面は朱色、外面は黒色に漆塗りされ、器表面に朱色と黄色で各種文様を描いており、これとは対照的に朱色地に黒色で文様を描いたものも見られた（挿図 25）。文様は各種の鳥獣が主文様に描かれており、これと共に花文、草花文、唐草文など植物文と火焰文、鋸歯文、格子線文、珠文等が互いに複合的に施文されていた。

文様に対する説明は別に詳細に説明されているので、重複をさけてここでは説明が不足している一部遺物と器形をある程度推測することができる遺物を中心に簡略に説明するにとどめる。

図版 151-1 は耳杯とみられる木心漆器で、潰れた状態であるため、正確な器形を知ることができない。内面は朱色、外面は黒色に漆塗りし、器表面に文様はみられない。口径 10cm 前後の小型容器である。

図版 151-2 は器形が分からない口唇部破片で、内外面が共に黒色に漆塗りされており文様はない。木目が横になった薄い木心でできている。

図版 151-3、4 は方形鍔盒の破片で、薄い木心に内面は朱色、外面は黒色に漆塗りした。器内部を四分割し、外縁と仕切りの高さが 2cm で、一辺 14cm 前後の長方形容器である（挿図 26）。

図版 152-1 は耳杯形漆器の胴部破片で、黒色に漆 1 所属と職位は報告書刊行当時。

塗りした器表面に朱色の草書体で「東」という漢字銘文が書かれており注目される。薄い木心に内面が朱色で漆塗りされており、扁平な底の破片が一部残っていた。

図面 152-2 は器形が分からない漆器の残片で、黒色地に朱色で歩行する姿の牛や馬を描いた。

図面 152-3 もまた動物文が描かれた残片で、尾を上に向けて鬣をなびかせて走る姿の馬の後ろに 2 頭の歩行する姿の馬が描かれており、共に朱色で外形を描き、黄色で細部を描写している。特に走る姿の馬は、尾を振り立てた形と鬣の描写などその全体的な姿が天馬塚出土の白樺樹皮製障泥に描かれた天馬と似た姿をしており注目される。

図版 154-1 は深さのある円筒形の蓋とみられ、口唇部周囲に 1.5cm 幅の朱色線帯を巡らし、その間には朱色と黄色で構成した鋸歯文を、そして鋸歯文間の空間には 4 個ずつの黄色珠文を入れた。朱色線の下には狭い間隔で黄色と朱色の 2 本が巡る線を入れ、胴部に一体の鳳凰を描いている。

図版 154-2 も深さがある小型蓋とみられ、黒色で漆塗りした器表面に鋸歯文と水鳥とみられる小さな鳥を数羽描いている。口唇部周囲に描かれた鋸歯文は朱色と黄色を交互に使用し、上下互い違いに描いており、胴部に朱色で描かれた鳥も器表面に 3～4 段に互いにずらして配置されている。

図版 154-3 も残存状態から見て蓋と考えられ、先述したものに比べてサイズが小さいものとみられ

る。黒色で漆塗りした器表面の口唇部周囲に朱色線を配置し、その間に 2 条の平行波状文を朱色で描き、そしてその下に黄色珠文を入れた。胴部には全面に 3 段の火焰文式に表現した山形を連続的に描き、その間あいだに 8 個の方点が周囲にめぐる珠点を入れている。

図版 154-4 は器形不明のもので、朱色地に斜格子文を描き、その間に黒色円文を描き入れ、外縁には鋸歯文を描き、間あいだに小さな珠文を配置している。残片から判断すると、器内外面が共に朱色に漆塗りされていたものとみられる。

この他にも各種文様が描かれた多くの破片がみられるが、その輪郭を確認するのが困難な残片については省略する。

原載：

文化財研究所・美術工芸研究所編 1985 『皇南大塚 I (北墳) 発掘調査報告書』文化財管理局:137-138.

公開先：

『皇南大塚』北墳（韓国文化財庁 HP）：

http://www.cha.go.kr/cop/bbs/selectBoardArticle.do?nttId=15890&bbsId=BBSMSTR_1021&pageIndex=1&pageUnit=10&searchCnd=tc&searchWrd=%ed%99%a9%eb%82%a8%eb%8c%80%ec%b4%9d&ctgryLrcls=&ctgryMdcls=&ctgrySmcls=&ntcStartDt=&ntcEndDt=&searchUseYn=Y&mn=NS_03_08_01

金冠塚出土漆器の調査

キム キョンス
金庚洙

（韓国国立中央博物館）

（大谷 育恵 訳）

I. はじめに

漆は漆の木から採取した天然塗料で、古代より日常生活用具と工芸品など各種器物の外観を飾る材料として利用されてきた。わが国では慶尚南道義昌郡茶戸里と全羅南道光州市新昌洞などの地から多数の漆器資料が出土しており、それ以前の時期である青銅器時代から漆器が製作・使用されていたことが確

認された。

漆技法は各時代と周辺環境の影響を受けて変化したり発展したものであり、漆技法は時代的・地域的特性を通過してきている。したがって漆技法の細部分的な部分を把握することは、漆を媒介とする文化の交流を解明するための大きな助けとなる。

II. 調査対象および方法

2.1. 調査対象

金冠塚から出土した漆器を対象としたが、元々の形態を保っているものはない。このうち、試料採取が可能な 7 点を対象に調査した。大体の漆器は内側が赤く外側が黒い色に作られているため、同じ番号で登録されたもののうち、赤く見える漆片とそれ